さゝがにの糸玉つらぬみ庵のありしむかしを慕ひおろがむ
たへだへにつたふ懸樋に水汲みつゝみさはにせりつむひじりとほとし
夜もすがら要文誦持の聲たへぬとほきみ世こそ慕はしきかな
ぬかずけば胸ちにせまるちからありみたまは今もこゝにいませり

戰傷の弟に

なりたちし醜のみ盾のいたつきに哀れ伏すてふ吾れかはらめや
すめらぎの防人汝れの今にして白妙の姿おろがむ吾れは
大君にささげし生命ながらへて白妙につゝむ赤きこゝろを

野菊

母そばの母めでませし一本のま白き野菊はこゝに咲けるに
ま白なる野菊手折りてとみこうみ心しめやかに母を慕へり

俳句

若葉明るう雨過ぎてゆく山の晝　　嫩葉子
花菖蒲朝をきほひて鯉の群
團扇つかふ音のみに更けて床の暗
蠶の匂ひこもりて峽の村十戸
明けて行く堂うそさむし燭のゆれ
谿に架す長き廊下や夕紅葉

黒宮敎文

をしのびつゝ行に學に一意精進を續けて居るものである。それにしても思ひ起すもの、眼に日夜浮び來るものは父母の姿である。川上川の上流風光淸き處、日親上人血染の寶塔、淸正公槍先の題目の靈蹟地寶塔山の拜殿正面に喜びの涙拭ひつゝ我が母が報恩感謝の赤誠こめて寄進した一尺五寸の大磬子、その銘に曰く、

「豚兒儀、陸軍士官學校在學中胃下垂症を患ひ、その後更に肺結核、肋膜炎、腹膜炎、脊髓カリエスを患ひ病床に呻吟する事三ケ年その間死に直面する事前後九回、時に昭和三年四月八日斷然身命を捨てゝ法華經を信仰し三年跣足詣りの大願を立て神佛の加護を乞ひ奉りしに一念感應ましませしか大願成就の日病魔忽ち退散したるを以つて謝恩の爲磬子一個寄進し奉るもの也

昭和六年四月四日　施主小林みつ子

寶塔山主寶藏寺　學進代」

母は死すとも寶塔山の磬の名の存する限り母の愛は永へに世に輝くであらう。

— 完 —